

島原競馬場

— 京都競馬場 100 周年 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 島原競馬場復元と京都市サーチパーク9号館付近(南西から)

京都の競馬場 京都にある競馬場といえば京阪淀駅の北東にある京都競馬場が思い浮かぶと思いますが、明治時代から大正時代、最初は下京区の島原の西側にあったのはご存じですか？

ここでは京都最初の競馬場である島原競馬場を復元・紹介したいと思います。

調査の経過 大阪ガス京都製造所の跡地に計画された府・市・民の先端技術を集約する施設（リ

サーチパーク）の建設に伴って1987年から2018年まで22次に渡って行なわれた発掘調査では、平安京の遺構と共に大正時代の溝が複数箇所で見出されました（写真1）。溝のサイズは内溝が幅5.6～6.0m、深さ約0.5m。外溝が幅4.4～5.0m、深さ約0.4mと幅の広いものです。七条中学校（写真2）その他周辺の発掘調査でも同様の溝が見出されていることがわかりました。これらの溝と大正

時代の地図とを合わせて検討した結果、馬場の内周と外周を巡る溝であることが明らかとなりました。この辺りは水はけが悪い場所であったことから、馬場の周囲に溝を設けたと考えられます。

出土遺物 写真1の調査では内溝から蹄鉄^{ていつて}が出土しました（写真3）。縦11.5cm、横9.2cm、厚さ7mm^{ひつめ}で、蹄^{ひょう}に取り付けるための^{びょう}鉋^{きょう}穴が左右に各4ヶ所、計8ヶ所開いています。現在の競走馬に装着

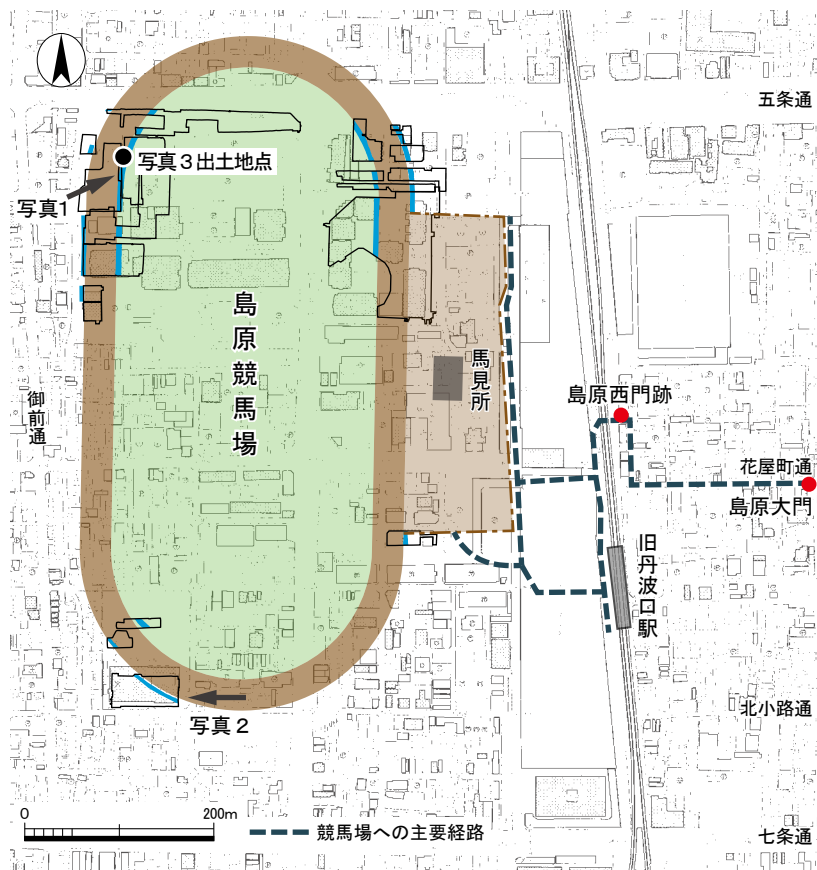


図1 島原競馬場復元図 (1 : 8,000)



写真2 検出した内溝 (北東から)



写真3 出土した蹄鉄

するものよりも一回り小さく、当時の競走馬が小型であったことがわかります。

馬場の復元 当時の資料には「馬場は敷地の中、約一万五千余坪を以て之に充て、幅十七間 (33.15 m)、周囲一哩 (約 1609.34 m) の楕円形にして、(中略) 馬場の中央より約十五間 (29.25 m) を隔てたる処に、西向きにて幅十六間 (31.2 m)、長さ二十四間 (46.8 m) の木造一棟を馬見所とし (中略) 厩舎は北方六棟を以て之に充て、優に百二十余頭を収容し得る可し」(『馬匹世界』明治41年第8号)とあります。馬場の形は検出された溝から復元すると、運動場のトラックと同様の楕円形になります。検出された内溝の外周から形を復元していくと、ちょうど1マイルの楕円形となります。馬場の幅は内

外溝の馬場側の肩から測ると約33 mとなり、資料と一致します。馬見所の建屋は現在のところ遺構が検出されておらず、資料の数値をあてはめたものです。厩舎は国土地理院の『大正元年正式地形図』で確認することができます。

島原競馬場 明治40年(1907)京都市下京区にある島原の西側に競馬場が建設されました。馬場は北は五条通の少し北から、南は北小路通、東は京都リサーチパーク2号館、西は御前通までの範囲になります。競馬場の建屋や正面入口は東側にあり、島原の中心を通る花屋町通を主要経路として利用されました。丹波口駅も当時は花屋町通の南にあり、アクセスしやすい場所にありました。第1回京都競馬開催の際には、島原の大門・西門・競馬場入口に大緑門(アー

チ)を設けたそうです。近畿圏だけでなく各地から多くの人が観戦に押し寄せました。しかし明治41年(1908)の馬券禁止令による人気の低迷、大正元年(1912)の火災による施設の焼失と、土地の賃借期限が迫ってきていたことが重なり、大正2年(1913)に船井郡須知町(現京丹波町蒲生)へと移転しました。その後、大正14年(1925)に紀伊郡向島村大字葭島新田、すなわち現在の場所へと移り、京都競馬場として親しまれています。島原競馬場の跡地には中学校や京都瓦斯(のちに大阪ガスと合併)の工場が建設されました。

京都競馬場は、令和7年に100周年を迎えるにあたり、令和5年4月22日に改修工事を終え、グラウンドオープンされます。

(樋口武志)